６愛防第６－８号
令和６年 12 月 27 日

各関係機関・団体長　様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、１月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（１月）

令和６年 12 月 27 日
愛　　媛　　県

１　気象予報（高松地方気象台）
　１か月予報（令和６年 12 月 19 日発表）の解説
　向こう１か月の天候の見通し　四国地方（12 月 21～１月 20 日）

＜　１か月の平均気温・降水量・日照時間　＞

	平均気温（１か月）	降水量（１か月）	日照時間（１か月）
四国地方	低 50 並 40 高 10% **低い**見込み	少 50 並 30 多 20% **少ない**見込み	少 20 並 30 多 50% **多い**見込み

＜ 予報のポイント ＞
　向こう１か月の気温は、寒気の影響を受けやすいため低いでしょう。特に２週目の気温はかなり低くなる可能性があります。
　低気圧の影響を受けにくいため、向こう１か月の降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

２　病害虫の発生予想
　野　菜
　(1)　黄化えそ病（冬春きゅうり）
　　ア　予報の内容　　<u>発生量：やや少</u>
　　イ　予報の根拠
　　(ｱ) 12 月中旬の促成栽培の調査では、発生を認めていない。また、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生も認めていない。
　　(ｲ) 気象予報では、気温は低いとされており、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生に抑制的である。
　　ウ　防除上の注意
　　(ｱ) 発病株は直ちに抜き取り、適正に処分する。
　　(ｲ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では、発生に応じて２～３回、連続散布する。
　　(ｳ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、除草を行う。

　(2)　べと病（冬春きゅうり）
　　ア　予報の内容　　<u>発生量：並</u>
　　イ　予報の根拠
　　(ｱ) 12 月中旬の促成栽培の調査では、発生は平年並である。
　　(ｲ) 気象予報では、降水量は少ないとされているものの、気温は低いとされており、施設内が結露する時間が長くなることから、現在の発生傾向が続くものとみられる。
　　ウ　防除上の注意
　　(ｱ) ハウス内の換気を行い、多湿を防止する。
　　(ｲ) 成り疲れ、肥切れは発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
　　(ｳ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。
　　(ｴ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏の菌叢にかかるように散布する。

　(3)　褐斑病（冬春きゅうり）
　　ア　予報の内容　　<u>発生量：並</u>
　　イ　予報の根拠
　　(ｱ) 12 月中旬の促成栽培の調査では、発生を認めていない。

(ｲ) 気象予報では、降水量は少ないとされているものの、気温は低いとされており、施設内が結露する時間が長くなることから、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ　防除上の注意

(ｱ) ハウス内の換気を行い、多湿を防止する。

(ｲ) 草勢低下、窒素質肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(ｳ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(ｴ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(4)　うどんこ病（冬春きゅうり）

ア　予報の内容　　発生量：並

イ　予報の根拠

(ｱ) 12 月中旬の促成栽培の調査では、発生を認めていない。

(ｲ) 気象予報では、降水量は少ないとされているものの、気温は低いとされており、施設内が結露する時間が長くなることから、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 老化葉や著しく発病した葉を除去し、伝染減の除去と薬剤の付着性を高める。

(ｲ) 薬剤散布に当たっては、展着剤を加用し、葉表だけでなく葉裏にも薬液が付着するように散布する。

(5)　うどんこ病（冬春いちご）

ア　予報の内容　　発生量：やや少～並

イ　予報の根拠

(ｱ) 12 月中旬の調査では、発病葉率は平年並、発病果率はやや少である。

(ｲ) 気象予報では、降水量は少ないとされているものの、気温は低いとされており、施設内が結露する時間が長くなることから、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 発病葉・果実や古葉はできる限り除去し、伝染源の除去、通風の確保と薬剤の付着性を高める。

(ｲ) 今後、果実発病が中心となってくるため、発病初期の防除に重点を置く。

(6)　灰色かび病（冬春トマト、冬春きゅうり、冬春いちご）

ア　予報の内容　　発生量：並

イ　予報の根拠

(ｱ) 12 月中旬の調査では、発生は冬春いちごでは平年並、冬春トマト、冬春きゅうり（促成栽培）では発生を認めていない。

(ｲ) 気象予報では、降水量は少ないとされているものの、気温は低いとされており、施設内が結露する時間が長くなることから、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ　防除上の注意

(ｱ) ハウス内の換気を行い、多湿を防止する。

(ｲ) 過繁茂や軟弱な生育は発病を助長するので、適正な潅水や肥培管理に努める。

(ｳ) 果実に付着した花弁・発病果・枯死茎葉は早めに除去する。

(7)　ハダニ類（冬春いちご）

ア　予報の内容　　発生量：少～やや少

イ　予報の根拠

(ｱ) 12 月中旬の調査では、発生はやや少である。

(ｲ) 気象予報では、気温は低いとされており、発生にやや抑制的である。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 圃場観察を行い早期発見に努め、低密度時に防除する。

(ｲ) 薬剤は、薬液が葉裏までかかるよう散布する。

(ｳ) 同一系統の薬剤の連用を避け、気門封鎖剤を含む系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

(ｴ) 薬剤の選択に当たっては、ミツバチ等への影響を考慮する。また、天敵を導入している圃場では、活動に影響の少ない薬剤を選択する。

(8) アブラムシ類（冬春いちご）

ア　予報の内容　　発生量：少～やや少

イ　予報の根拠

(ｱ) 12 月中旬の調査では、発生はやや少である。

(ｲ) 気象予報では、気温は低いとされており、発生にやや抑制的である。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 圃場観察により早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。

(ｲ) 薬剤の選択に当たっては、ミツバチ等への影響を考慮する。また、天敵を導入している圃場では、活動に影響の少ない薬剤を選択する。

(9) コナジラミ類（冬春トマト、冬春いちご、冬春きゅうり）

ア 予報の内容　　発生量：オンシツコナジラミ　やや少～並
タバココナジラミ　　冬春トマト、冬春きゅうり　やや少～並
冬春いちご　やや多～多

イ 予報の根拠

(ｱ) 12月中旬の調査では、オンシツコナジラミは、各作物とも発生を認めていない。タバココナジラミは冬春きゅうりでは発生を認めていないが、冬春トマトで平年並、冬春いちごで多である。

(ｲ) 気象予報では、気温は低いとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ｱ) 薬剤の散布に当たっては、葉裏にも薬剤が付着するように散布する。

(ｲ) 本虫は、多くの植物に寄生するため、ハウス内の除草を行う。

(ｳ) タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルスを媒介するので発生に注意する。

(ｴ) 今後定植予定のハウスでは、コナジラミ類のハウス内への侵入・分散を防ぐため、ハウス開口部に防虫ネット（目合い 0.4mm 以下が望ましい）を設置する。また、紫外線除去フィルムを組み合わせるとさらに効果的である。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。
ホームページアドレスは、https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojo/

【農薬使用時の注意】

◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。

◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。

◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。

◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。

◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。

◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。

◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。

◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。